

幼児期の豊かな学びを小学校と地域でつなぐ取り組み

小学校（コミュニティ・スクール）の実践

本市は、中学校区ごとに3つの『コミュニティ・スクール』（高萩東CS、秋山CS、松岡CS）を形成している。幼稚園と小学校のみの連携、協力だけではなく、各小中学校の地域連携コーディネーターが中心となり、コミュニティ・スクール全体として地域の人々とともに幼児期から小学校への移行がスムーズにできるよう様々な活動に取り組んでいる。

参加者 園児、児童、教職員、はぎっズサポーター、地域連携コーディネーター、コミュニティ・スクール委員 など
準備 それぞれの活動における準備物

■ 地域で支える取り組み

- 入学時期の朝の準備のお手伝い
- 学校体験（ザリガニ釣り、秋まつり等）
- 給食体験
- 合同あいさつ運動
- 小学校教員の幼稚園訪問
- 防災訓練
- 給食体験
- 人権教室の開催
- 幼児教育施設の小学校訪問
- 訪問型家庭教育支援員の活動周知、相談活動
- 小学校の1年生の全家庭へのアンケートの実施



○ 幼児教育施設保育者の意見から

- ・園児たちは、小学校とはどんなところかを肌で感じることで、不安感が軽減やし、見通しをもつことにつながると感じた。
- ・小学校での学びを意識しすぎず、幼児期の「遊び」を通した学びを存分に経験させることで、小学校につなげたい。

○ 小学校教員の意見から

- ・幼児期にどのような学びをしているのかを知ること、入学してきた際には、「遊び」を通した「学び」につなげるよう意識することができた。
- ・小学校と幼児教育施設の職員だけではなく、地域の方々の力を借りることで、幅広い活動ができ、児童だけではなく、たくさんの大人とかわりをもつことが有意義なことだと思う。
- ・幼児とのかかわりは、児童にとっても成長につながると思う。

- ・コミュニティ・スクールの機能を生かした連携は今後も継続していきたい。
- ・入学前の幼児一人一人における情報交換は今後も継続するが、入学後に小学校と幼児教育施設の先生の意見交換の場を設けることで、よりよい支援ができると思う。

「鹿嶋市アプローチ・スタートカリキュラム」の実践事例 ～保幼小の連携接続を意識した創意工夫ある取組事例～

「鹿嶋市アプローチ・スタートカリキュラム」にもとづいて、各校が、幼児教育と小学校教育との円滑な接続を推進する。全職員でスタートカリキュラムの目標を共有し、1年生の児童を見守り育てながら、1年生の児童が安心して小学校生活を送ることができるようにしている。

■スタートカリキュラムの実践（接続を意識した取組事例）：鹿嶋市立三笠小学校の例



【登校班バディ】

安心して学校生活のスタートを迎えることが、その日1日の過ごし方に大きく影響する。そのため、登校班の新入学児に対して上級生が一人ずつバディとして組み、登校中の見守り、登校後の朝の支度のサポートをしながら励ましの声掛けをする。上級生とのつながりがもて、気持ちのよいスタートをきることができている。



【なかよしタイム】

朝の挨拶、健康観察後に、他学年より長めの準備時間を設定している。折り紙やお絵かきなど思い思いに活動したり、担任による読み聞かせ、動画を活用した手遊びなどをみんなで楽しんだりする。始業前に、心身共に十分に満たされる時間を設けることで、授業への意欲や関心の高まりが図られ、学習にスムーズに取り組めるようになっている。

■教員の保育参観による幼児理解及び接続への意識向上：鹿嶋市立平井小学校の例



【保育参観】

6月、8月に「保育環境」「幼児との関わり」「個別指導」の共通の視点で参観をした。視覚的な環境の工夫、参考となる関わり方や取組を日々の学校生活で取り入れることにより、児童にとってより安心できる環境を整えることができた。また、幼児の遊びのねらいを知ることによって、幼稚園、保育園で学んだことを、学習活動の中で生かすことができている。

<まとめ>

幼児教育で育まれた資質能力を、小学校教育の中で発揮させるためには、安心して過ごすことのできる環境の整備が必要である。本市の各小学校と幼児教育施設は教職員と保育者が積極的に相互参観をしたり、情報交換等の話し合いを行ったりしている。また、コロナ禍の中ではあるが、小学生と園児の交流も、生活科の学習や学校行事等を通して行われており、接続を意識した創意工夫ある実践をしている。

相互の教育について理解し合うことが連携・接続の基本である。今後は、「架け橋期」を意識し、学びの連続性を意識したカリキュラムを市全体で再構築し推進していく。

園小交流事業・5歳児を対象とした外国語に触れる活動

義務教育学校前期課程専科教員・ALT をこども園に派遣した実践

河内町が力を入れている外国語教育を、こども園に通園している子どもたちが体験できる場を設定し、「子どもたちが友達や先生と一緒に活動を楽しむ機会」「遊びの中で子どもたちが外国語に触れる機会」「子どもたちが義務教育学校に入学した際、一つでも『知っていること』を増やす機会」とした。具体的には、2つのこども園にそれぞれ前期課程専科教員とALTを派遣することを企画し、5歳児を対象に45分の実践を行った。

参加者 公立こ園児：20名、公立こ職員：4名、義務教育学校職員：3名、
教育委員会職員4名

準備 事前に用意・連絡しておいたもの

第1回園小連絡会（こども園・学校・教委）における外国語活動への協力の呼びかけ
義務教育学校と幼児教育施設との日程調整、開催文書

■外国語に触れる活動「外国語を楽しもう」

※5歳児を対象に、次のような流れで活動を実施した。

- ・天気を表す英語を言葉とジェスチャーで伝えよう
- ・英語の歌を歌おう
- ・英語での果物の言い方をフルーツバスケットで使おう
- ・聞いてみたいことを質問してみよう



※外国語の言葉だけでなく、イラストを使って補助していたので、園児たちの「自分もできる」「自分もやってみたい」という主体性を引き出すことができた。

※質問の場面では、園児が好きな野菜とALTが好きな野菜が一致し、園児たちは「外国から来た方も同じ人間だ」という思いをもつことができた。

■協議（紙面・口頭）における主な意見

※市町村幼児教育アドバイザーが間に入り、両施設の意見等を紙面や口頭で伝える形で意見交換を行った。両施設からは、次のような意見が出てきた。

○幼児教育施設保育者の意見から

- ・活動が終わった後、園児は地球儀や世界地図を見たり、習った歌を口ずさんだりするなど、外国語に興味をもった様子を感じられた。2回目も実施してほしい。
- ・園児たちの新たな姿を見ることができ、とても有意義な時間だった。
- ・園児が興味をもてるようにするための活動の進め方がとても参考になった。

○義務教育学校前期課程専科教員・ALTの意見から

- ・こども園ごとに園児の雰囲気や異なり、園児の様子を知ることができてよかった。
- ・義務教育学校に兄や姉がいる園児も多く、声もかけられ、身近に感じてもらえたようだ。
- ・園児たちが活発に活動している様子を見て、こども園の指導がしっかりしていることを感じた。

義務教育学校前期課程教員とALTを初めてこども園に派遣できたことは、5歳児にとっても幼児教育施設の職員にとっても、非常に効果的な取組であった。前期課程教員の負担もあるが、2回目の活動も実施できるように依頼していく予定である。

円滑な保幼小の接続を目指した幼児教育施設園内リーダーや小学校保幼小コーディネーターの取組

保育園・小学校の実践

幼児と児童の交流や進級する幼児の共通理解を図ることで、コロナ禍においても幼児教育から小学校教育へ円滑な接続につながるような取組を実施する。特に年長児と1年生児童が交流することで、入学への意欲を高めたり、不安を和らげたりすることをねらいとする。

参加者 私立保：年長児、小学校：1年生児童

準備 <小学校> 学習体験を目的とした生活科の学習で使用される植物やおもちゃ等
<保育園> 園の畑で育てたさつまいも、交流の場

■接続カリキュラムの実践

保育園の取組



小学校教員の保育園訪問



保育園の畑のさつまいもを園児と小学生が収穫した食事会



小学校の取組



園児・小学生の合同避難訓練



園児の小学校授業参観



小学生と園児の交流

■実践をもとにした検討・課題

○幼児教育施設保育者の意見から

- ・1年生との交流シーンの写真を幼稚園・保育園で掲示することで、継続して、進級の意欲を高められる。
- ・保育参観や授業参観など、保育者と小学校教員の積極的な交流は、安全面から難しいこともあるが、少人数に限定して行っていく意義も感じる。

○小学校教員の意見から

- ・生活科など、教科横断的に交流を考えることも、必要である。
- ・幼児施設職員と交流・体験内容の共有を行うことで、教育的効果を高めたい。

よりよい保幼小接続・連携のためには幼児教育と小学校教育の相互理解が必要なことから、コロナ禍においても幼児・児童の交流活動は続けていきたい。また、職員の相互参観も感染対策を十分に行い、実施することで、事例の持ち寄りや意見交換につながり、お互いのカリキュラムの改善になるようにしていきたい。

交流会や保育参観、連携会議を通じた 円滑接続ステッププラン

かなくぼ保育園・結城市立絹川小学校との実践

小学校入学にあたっての不安やスムーズな接続を図るために、年長（就学予定）の保育園児を招いての交流会を実施した。また、就学前の情報交換の必要性が高いことから、小学校教諭と特別支援コーディネーターが保育園を訪れ、保育参観を実施した。その後、気になる園児や保育園での生活について、連携会議を行った。

参加者 【交流会】かなくぼ保育園児：16名、絹川小学校児童：22名
【保育参観・連携会議】かなくぼ保育園：4名、絹川小学校：3名
準備 1年生が作成した手作りおもちゃ、ランドセルやタブレット機器
保育園からの情報、個別の支援計画 等

■ 交流会の実施

就学予定のかなくぼ保育園の年長園児を招いて交流会を行った。1年生が手作りしたおもちゃを使って一緒に遊んだり、校舎内を案内したり、ランドセルやタブレット端末を活用して1年生の生活や授業について紹介した。



■ 保育参観・連携会議の実施

1年生の担任と特別支援コーディネーター教諭が、かなくぼ保育園を訪れ、保育参観を行った。その後、気になる園児や保育園での生活について、園の先生や園長先生と情報交換及び引き継ぎを交えた連携会議を行った。



■ 実践における主な意見・感想

○ 幼児教育施設保育者の意見・感想

- ・園児たちは、小学校へ入学することへの楽しみや不安を抱えているので、学校の環境や生活の様子などを知ることができて良かった。
- ・小学校の生活の様子や約束事を確認することができたので、就学までの過ごし方や生活の改善点など保護者への情報提供ができた。

○ 小学校教員の意見・感想

- ・実際の生活の様子を見ることができて、園児の理解が深まった。気になった園児についても、保育園の先生と情報交換をすることができて良かった。
- ・それぞれの要望等も率直に伝え合うことにより、お互いに連携していこうとする意識が高まった。

幼児と児童の交流を通じて、円滑な接続ができるようになっている。また、就学前の情報交換の必要性への認識は高いので、引き続き保育者と教員との相互訪問や情報交換を実施していきたい。更に、就学後の情報交換の場も設定して児童理解を深めていきたい。

小学校保幼小接続コーディネーターの取組について

保育参観・授業参観



参加者：各小学校区にある幼児教育施設の先生方
各小・義務教育学校の1年生担任、特別支援コーディネーター
＜内容＞：年長クラスの様子を見てもらう保育参観
情報交換



接続カリキュラムの実践



【時期】入学してから1週間

【内容】学校探検、トイレの使い方、ロッカーの使い方
返事の仕方や鉛筆の持ち方、廊下の歩き方、プリントの
渡し方、給食当番の仕事、学校のきまりについて 等

【時期】4～5月

【内容】1日ひとつ新しいチャレンジ（スモールステップ
の目標設定）、各教科モジュール形式での学習活動、
体験的・操作的、作業的な学習を取り入れた授業展開、
保護者との関係づくり（小・義務教育学校生活への安心
感につながる情報提供）

幼児と児童の交流について

＜R5・2～3月実施予定＞



- 幼児が1年生と一緒に折り紙を折ったり、絵を描いたり、トントン相撲などをしたりする。
- 校内案内、ランドセルを背負う体験をする。
- 交流活動：図画工作「ぼく・わたしをえがこう」
 - 描いた作品は入学時の教室環境に使う
生活科「おもちゃをつくってあそぼう」
 - 作ったおもちゃは体験学習の記念としてプレゼント
生活科「できるようになったよ」の発表会
- 1年生の学習・生活の様子を紹介をVTRにまとめて各園にプレゼントする。

意見交換から

- 新年度の担任に確実に伝達するために、情報交換を密にすることが大切である。
- 「茨城県保幼小接続カリキュラム」、「保幼小接続プログラム」を活用したことが効果的であった。

